

養生のすすめ

米国在住内科医

大西壁子

開始したこと後悔していた

連載第十五回

フランスの状況は興味深い。〇四年の報告では、フランスのある地域の十一の透析ユニットで、〇一年に死亡したすべての慢性腎不全患者の結果を分析した。一千四百三十六人の透析患者のうち、百九十六人（一三・六%）が死亡した。この調査でも、最も一般的な死因は透析の中止で、四十人（二〇・四%）を占めた。

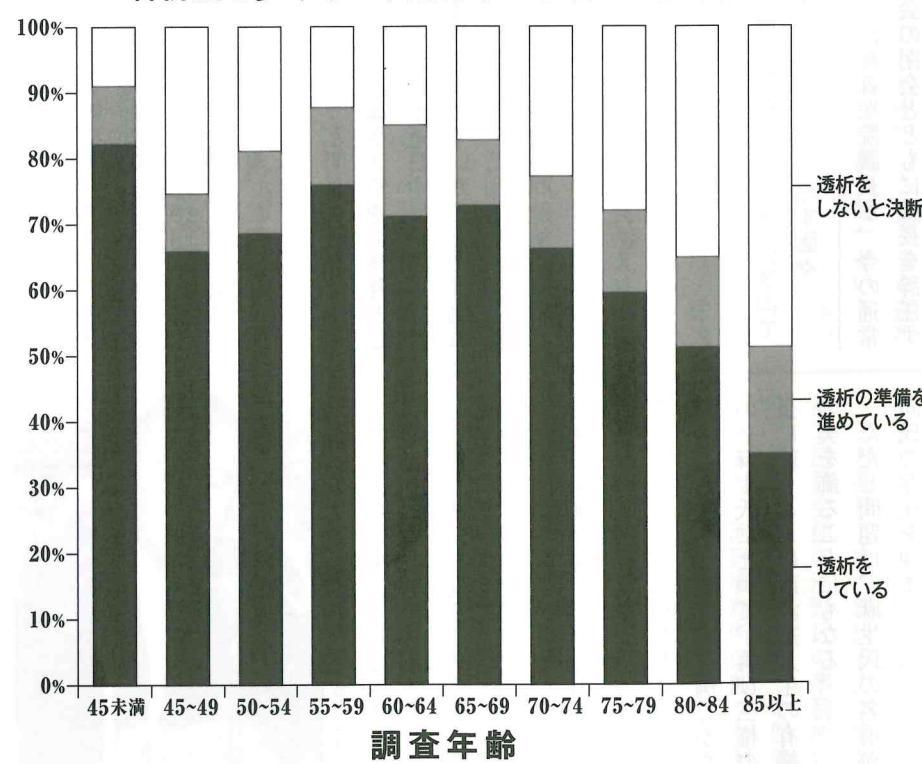
ただしフランスでは、透析の中止は、ほとんどの場合（七七・五%）が医師によって決定された。その理由を研究者らは、家族が透析中止の決断に責任をもつと罪悪感を抱く可能性があること、自分の体に対する自己責任という考えが北米のように受け入れられないこと、患者とその家族に対する医師の態度はしばしば父性主義的であることと説明している。

一方、知り合いの日本人専門医に日本の状況を聞くと、「透析の中止は、日常診療の中で、透析が低いと透析ができず、この場合継続できない低血圧が起きた場合は家族の同意のもとで行う。血圧は仕方がないこと。それ以外の理由で、患者が望まないからと透析

腎不全が進行しても透析を最初から導入しないことはある。その際も家族によく説明した上で導入しないことになる」と話す。

二〇一九年一月の米医師会の雑誌の報告によると、ワシントン大学の研究者らは「(前述の)米退役軍人省の調査で、透析を中止した患者はわずか一四・五%。実際の臨床現場でどのように透析の中止が展開されているのか」と疑問を抱いた。すると「医師は、末期腎不全患者の透析を標準的治療とみなし、透析ができるない患者にほどんど提供する医療はないと信じている」ことが明らかになった。研究者らは、医師は透析をするかしないかというオール・オア・ナッシングの医療ではなく、透析をしたくない患者を支援する、患者を中心の取り組みが必要と訴えた。この論文はニューヨーク・タイムズ紙にも紹介された。その中に、「透析患者にとって、生存だけが価値ではない。週に三回、一回四時間の透析をやめて数週間または数カ月の寿命が短くなつたとしても、

合併症を多くもつ末期腎不全患者の選択(年代別)



Clin J Am Soc Nephrol 11: 1825–1833, 2016を参照に著者作成

3 新不養生のすすめ

2019.4 選択

2019.4 選択

新不養生のすすめ

42

For Teshada Herring, the action was unmistakable: The
on their faces and fitting scarves to their heads were pre-
ritual - well known to Philadelphia ch-
scarfing in their robes getting ripped out. As Teshada pa-
way to class at Alberic High that morning, the events
flashed through her mind - a fight she had witnessed, Face
someone from her neighborhood would be attacked, a te-

APR. 2019 VOL.45 NO.4

三万人のための情報誌

2019年4月1日発行 昭和50年3月17日第三種郵便物認可

第45巻第4号通巻530号 毎月1日発行

選択

4

